

アンドレ・モーロワ著「初めに行動があった」岩波新書、岩波書店 1967年4月20日刊を読む(II)

幸福な行動の中に

1. フットボールやラグビーの競技者たちは戦士のような勇気を示す。彼らは、攻撃をしながら、自分が泥まみれになったり、手足を折ったり、担架に乗せられて退場したりする危険があるということを知っている。しかし誰がそうした危険に思いを致す者があるろうか？問題は勝つことなのである。勝つて何を得ようというのか？何を得ようというのでもない。しかし彼らはこれらの闘争を愛する。これらの闘争は強い感激と同時に、情念を解放する運動を彼らにもたらす。彼らはその運動で——われとわが肉体を自ら支配していることを感じ、(自分のうちにあつてむずむずしているあの精^{せい}へ道をあけてやる)のである。観客も、代理行為によって、それらの強烈な行動をエンジョイする。ちょうどスタンダルの読者が、自分も作中の主人公になったつもりで、ド・レーナル夫人『赤と黒』の女主人公」やクレリア・コンティ『ベルムの僧院』の女主人公」を愛するように。観客は競技を見物することによって人間とその力とについて高い観念を得るのである。二度にわたって、卵形のボールに競技場の全域を横切らせた、すばらしい一連のパスの後に、フランス・チームによってあげられたトライは、軍事上の勝利にまさるとも劣らぬ美的よろこびと、精神的やすらぎとを、数百万のフランス人に与える。

2. (詩は最も美しい冒険である。)かくて芸術家は将棋の「キング」のような役割を演じる。しかし他の勝負事も尊敬に値する。そして(すべての人間のうちにある)冒険好きな精^{せい}は、(おのが力の許すところに従って飛び立つ)(アラン)。高い山々をよじ登ったり、そこで死と凍傷との危険を冒したり、深淵の底に降りたりすることは、無益なことのように見える。幸福のため以外には無益である。自分で登ることのできる人びとは登り、自分で登れない人びとは拍手喝采する。そして金持ちは自分の財産を用いてさらに働くのでなければほとんど幸福でない。競争相手を打ち負かして後も、財政家は危険を冒しつつけて自分自身を追い抜こうとする。自分の力で管理できる以上の事業を持っていても、新しい事業を創設する。支配権をふるって、大きな勝負をしてきた人にとっては、引退はほとんど耐えがたい。彼はその好きな薬、すなわち行動という薬の毒から解放されることはできない。彼に残されている手段は、回想録を書いて、その荒々しかった行動を再体験することである。

3. 新しい「黄金時代」と労働なき豊富とを可能ならしめるような社会があったとしたら、そうした社会は人間性というものを何にも理解していないことを示すものであろう。われわれが自ら築きあげる幸福以外に幸福はない。作家のよろこびは成功ではなくて、書くことである。フロベールはいつていた、(私は時として、生活にまさる一つの精神状態を垣間^{かいま}みました。この精神状態にとっては光栄も無にひとしく、幸福でさえも無用なのです……)無用、まことにそうである、なぜなら創造という行動によって幸福はすでに惜しみなく与えられていたからである。一つのリズムと単調な緒行動とを押しつける機械の奴隷である労働者は行動する以上に受動する。それゆえ不満なのである。ロボットが自由なき労働を引き受け、労働者がロボットを指導する暁には、労働者も幸福をふたたび見いだすであろう。人間は世界を変え、計画を立て、計画をためし、計画を立てなおしてしまつた、ということはいつになつてもないであろう。(初めに行動があつた。)